# 加藤清遺稿　蔵文和譯『世間施設』（４）

福　田　　琢（編）

**編者ノート**

本稿では既発表の「加藤清遺稿　蔵文和譯『世間施設』(1)」(『同朋佛教』第34号、1999年３月)、「同（2)」(『同朋佛教』第35号、1999年７月）「同（3)」(『同朋佛教』第36号、2000年７月）に続き、加藤清氏遺稿ノートを紹介する。このノートは本学園付属図書館に所蔵されている未公刊直筆草稿で、内容は、チベット語訳のみ完本が現存するインド仏典『施設論』(『世間施設』『因施設』『業施設』の三篇よりなる）の、世界でも初の全文翻訳である。その発見から公表に至る経緯、および原稿整理の基本方針については「『世間施設』(1)」の「はじめに」に記した。また加藤清（かとう・せい、1907-1956）氏の略歴については『日本仏教学会年報』第65号（2000年５月）所収の拙稿「『業施設』について」を参照されたい。

今回掲載する分は全９巻14章よりなるチベット訳『世間施設』の第６巻全文に相当し、最も長い第11章の大半が収録されている。この章はインド仏教コスモロジー文献としての『世間施設』の白眉ともいえる箇所である。インド仏教の世界観では、宇宙は天文学的な周期で生成発展と衰退滅亡のサイクルを繰り返していると考えられているが、ここではその滅亡から再生に至るプロセスが以下のように詳しく解説される。

**【劫滅時の三災】** まず人々の争いや疾病、飢饉などによって、わたしたち輪廻的生存（有情）の寿命が伸び縮みし、小規模の発展と衰退を重ねる様子が描かれる。(11-5～11-8)

**【世界の終焉】** 続いて本格的な世界の衰退がやってくる。はじめに餓鬼・地獄界が姿を消し、次に地上世界の生存が次々に瞑想（三昧）に入り、天上世界へと転生する。生命の消え去った世界に七つの太陽が現われ、海水を干上がらせ、地上を焼き尽くし、すべてを灰燼に帰し、虚空が残る。(11-9～11-12)

**【世界の再生】** 虚空世界に微風がそよぎ、やがて渦巻き状の激しい気流の輪（風輪）を生成する。この風輪（ヴァーユ・マンダラ）の上に雨が降り、雨水は風の力によって凝固し、金の円盤、水の円盤の層を作り出す。これらの層が新たな世界の基盤であり、水の円盤が大海となる。大海の中央、円盤の軸にあたる部分に、この宇宙の中心となるスメール山（須弥山)、およびそれを取り囲む山脈が形成され、さらにスメール山の四方に四つの大陸が現われる。すると天上世界に待避していた生命たちは、再び地上世界へと転生を始め、スメール山南方のジャンブー州（南贍部州）に生まれ変る。これが人間世界である。(11-13～11-29)

**【有情の転生】** 天の生存から転生したばかりの人間たちは長寿であり、姿は光輝き、無垢であり、天空を駆けることができるなど様々な超常能力をそなえているが、やがて地上の食事を口にするようになると、欲望を生じ、身心は汚れて重くなり、寿命は縮んでゆく。(11-30)

この『世間施設』と同様、仏教の宇宙論を説く文献として『世起経』『大楼炭経』などの阿含経典、『立世阿毘曇論』およびパーリ本『ローカパンニャッティ』といった初期インド仏教部派論書などがあることはよく知られている。またとくに今回紹介する第11章にかんしては『倶舎論』世間品の末尾、および『七日経』などの短編経典も対応資料として参照されなければならない。さらに、ギルギット出土写本、トゥルファン探検隊コレクション、そして日本の高貴寺に所蔵される写本から、それぞれ本章の一部に相当するサンスクリット原典が断片的に回収されることが報告されている（Cf. Siglinde Dietz, A Brief Survey on the Sanskrit Fragments of the Lokaprajñaptiśāstra, *Annual Memoirs of the Otani Universety Shin Buddhist Comprehensive Research Institute,* 7, 1989)。本来ならばこれら諸

資料から得られた情報も併せて本稿中に提示すべきところではあるが、既発表分の場合と同様、いまはひとまず和訳本文を紹介するにとどめ、本格的なクロス・リファレンスの作成は向後の課題としたい。なお、本文中に標題を挙げて引用される二経典についてのみ、ここに対応阿含資料の出典を示しておく。

**【教証 1】** 11-6. [59b[3]]『堅輻輪〔王〕教誨』(*Mu khyud brtan lung bstan pa, *Dṛḍhanemivyākaraṇa*)：パーリ長部 No.26「転輪王獅子吼経」(*Cakkavattisihanāda-Suttanta*) [*DN*. Vol. III pp.58-79] および漢訳『長阿含経』No.6「転輪聖王修行経」(**Cakravarit-sūtra*) [*T*. 1, 39a-42b]『中阿含経』No.70「転輪王経」[*T*. 1, 520b-525a] に対応。

**【教証 2】** 11-11. [66a[3]]『七日教誨』(*Nyi ma bdun lung bstan pa, *Saptasūryavyākaraṇa*)：パーリ増支部 VII, No.62「日〔経〕」(*Sūrya*) [*AN*. Vol. IV pp.100-106] および漢訳『薩鉢多酥哩喩捺野経』(**Saptasūryodayasūtra*) [*T*. 1, 811c-813a]『中阿含経』No.8「七日経」[*T*. 1, 428c-429c] および『増一阿含経』七日品第四十 No.1 経 [*T*. 2, 735b-738a] に対応。

経典名を挙げるにあたって「経」(sūtra) ではなく「教誨」(vyākaraṇa) という呼称を用いる点はサンスクリット本『法蘊足論』も同様であり、最初期の有部アビダルマ論書に共通する特徴と思われる。

# 蔵文和譯『世間施設』(4)

加　藤　　清

目次

第6巻　第11章（承前）

11-5. 十善業と寿命の延長（承前）[58b$^{2}$]／11-6. 教証（『堅輻輪〔王〕教誨』）[59b$^{2}$]／11-7. 疾病中劫 [59b$^{6}$]／11-8. 飢饉中劫 [60a$^{6}$]／11-9. 火壊中劫 [61b$^{7}$]／11-10. 七日 [63b$^{5}$]／11-11. 教証（『七日教誨』）[66a$^{3}$]／11-12. 風壊中劫 [66b$^{1}$]／11-13. 風輪の形成 [66b$^{4}$]／11-14. 水輪の形成 [66b$^{6}$]／11-15. 金輪の形成 [67a$^{2}$]／11-16. 海の形成 [67a$^{4}$]／11-17. 須弥山の形成 [67a$^{6}$]／11-18. 持雙山の形成 [67b$^{2}$]／11-19. 持軸山の形成 [67b$^{6}$]／11-20. 檐木山の形成 [68a$^{1}$]／11-21. 善見山の形成 [68a$^{5}$]／11-22. 馬耳山の形成 [68a$^{8}$]／11-23. 尼民達羅山の形成 [68b$^{3}$]／11-24. 障礙山の形成 [68b$^{6}$]／11-25. 鉄囲山の形成 [69a$^{2}$]／11-26. 南贍部州の形成 [69a$^{5}$]／11-27. 東勝神州の形成 [69b$^{2}$]／11-28. 西牛貨州の形成 [69b$^{7}$]／11-29. 北倶盧州の形成 [70a$^{4}$]／11-30. 地上世界への有情の転生 [70a$^{8}$]

## 第6巻

[58b$^{2}$]　世間施設第六巻なり。



## 第11章（承前）

### 11-5. 十善業と寿命の延長（承前）

[58b$^{2}$]　寿命一万歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしが故に寿

命はまた延長し、色と力と安楽と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然らば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に邪見あり、故に我等は邪見を断ずべきなり」と斯く思惟して、彼等は邪見を断ずるなり。寿命一万歳の〔諸〕人、邪見を断ずれば、彼等の産みたる諸児と諸児女は寿命二万歳を獲るなり。

[58b[5]]　寿命二万歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしが故に寿命はまた延長し、色と力と安楽と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然らば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に、非法（adharma）への貪着による貪欲（rāga）と、背理貪（niśama-lobha）によりて降伏せらること（abhibhāmama）と、邪法（mithyā-dharma）とあり、故に我等はこの三法を断ずべきなり」と斯く思惟して、彼等は邪見を断ずるなり。寿命二万歳の諸人、此等の三法を断ずれば、彼等の産みたる諸児と諸児女は寿命四万歳を獲るなり。

[59a[1]]　寿命四万歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしが故に寿命はまた延長し、色と力と安楽と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然らば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等は母を尊敬せず、父を尊敬せず、沙門を尊敬せず、婆羅門を尊敬せず、種族中の長老（jyeṣṭha）を供奉（upasthāna）せず、故に我等は母を尊敬し、父を尊敬し、婆羅門を尊敬し、種族中の長老を供奉すべきなり」と斯く思惟して、彼等は母を尊敬し、父を尊敬し、婆羅門を尊敬し、種族中の長老を供奉するなり。寿命四万歳の〔諸〕人、母を尊敬し、父を尊敬し、婆羅門を尊敬し、種族中の長老を供奉すれば、彼等の産みたる諸児と諸児女は

寿命八万歳を獲るなり。

[59a⁶]　寿命八万歳の諸人は此の贍部州にありて富（ṛddha）と豊満（sphīta）と安穏（kṣema）と豊年（subhikṣa）ありて多くの民衆は満足し、寿命八万歳の諸人の諸村・町・国土・王宮の周囲の間を寒鴉は彼方に飛行して拡がるのみとなるなり。

[59a⁸]　寿命八万歳の諸人の児女、生後五百歳に至れば妻として与へるなり。譬へば現在の諸人の児女は、十五歳もしくは十六歳に至れば妻として与へる如く、寿命八万歳の諸人の児女は生後五百歳に至れば妻として与へるなり。

[59b¹]　寿命八万歳の諸人の病には三種あり。即ち欲（kāma）と不飲食と老となり。

[59b²]　寿命八万歳の諸人の諸穀は大にして甚だ大なり。譬へば因陀羅竹（Indraveṇu）果の如く勝れ、最勝にして、唯だ一穂のみによりてさへ四斗斛を生ずるなり。

### 11-6. 教証（『堅輻輪〔王〕教誨』）

[59b²]　世尊は『堅輻輪〔王〕教誨』を以て斯く告げたまへり「比丘等よ、諸人は此等の悪不善法を如実に執持せしが故に寿命十数歳になりしなり。寿命十歳の諸人中、長生するものは十歳を獲ること前〔説〕の如し。寿命八万歳を獲たる諸人は此の贍部州にありて富と豊満と安穏と豊年になりて多くの民衆は満足し、寿命八万歳の諸人の諸村・町・国土・王宮の周囲の間を寒鴉は彼方に飛行して拡がるのみとなり、寿命八万歳の諸人の児女は生後五百歳に至れば前〔説〕の如し。寿命八万歳の諸人の病には三種あり。即ち欲と不飲食と老となり」と。

八一

### 11-7. 疾病中劫

[59b⁶]　疾病中劫の来たりて起こりし時、諸人の寿命は十歳に達するな

り。

[59b⁷]　「寿命十歳の諸人に於ては、長生の者は十歳を獲るなり」乃至「長く生きる婦人と児女と衣と食とは損減し、諸瓔珞と誹謗と瞋恚と」と総頌に云はるるまでは、前に〔刀兵中劫の説明に於て〕説かれたるが如し。

[59b⁸]　寿命十歳の諸人は非法を行じ、背理をなす。彼等が非法を行じ背理をなせるが故に、諸非人は時に憤怒して諸々の疾病と流行病と害と伝染病を与へるなり。その時即ち多くの人は病によりて死するなり。

[60a²]　その時、何処に〔生ずるが〕適切なるや。彼等一切の死〔人〕は肉身を離れて後、地獄に生ずるなり。

[60a²]　その疾病中劫はまた七ヶ月と七日のみにして尽くるなり。七ヶ月と七日をもって終末に至ると云はるるなり。それよりそれらの人は「我等は非法を行じ、背理をなす。このことと、苦悩を懐けるこのこととによりて、親族は尽き、財宝は尽き、受用もまた尽く。故に我等は善法を如実に執りて住すべきならん。されば我等は善法を如実に執りて住すべし」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に殺生あり、故に我等は殺生を断ずべきなり」と斯く思惟して、彼等は殺生を断ずるなり。寿命十歳の〔諸〕人、殺戮を断ずれば、彼等の産みたる諸児と諸児女は寿命二十歳を獲るなり。

[60a⁶]　広説して乃至「寿命八万歳の諸人は此の贍部州にありて富と豊満と安穏と豊年になりて多くの民衆は満足し…児女は生後五百歳に至れば〔妻として与へるなり〕」と云はるるまでは前に説かれたるが如し。

[60a⁷]　「病に三種あり」と云はるるより「諸穀は大にして甚だ大なり。譬へば因陀羅竹の果の如く、勝れ、最勝にして、唯だ一穂のみによりてさへ四斗斛を生ずるなり」と云はるるまでは〔前〕に広説

せられたるなり。

## 11-8. 飢饉中劫

[60a⁶]　飢饉中劫来たりて起こりし時、諸人の寿命は十歳に達するなり。

[60b¹]　「寿命十歳の諸人に於ては、長生の者は十歳を獲るなり」乃至「寿命十歳の諸人は非法を行じ、背理をなす」と云はるるまでは、前に説かれたるが如し。

[60b²]　彼等が非法を行じ、背理をなせるが故に、天は時に甘雨を降らさず、「飢饉」(durbhikṣa) と「大聚集」(mahagaṇa, samāja) と「阿蘭若」(araṇya) と「籌によりて生活すること」(śalākāvṛtti)「困苦」(āpat) と「白骨」(śvetāsthi) とが生起するなり。

[60b³]　「飢饉」と謂はるるは、その時、乞食者は乞ふも獲ること困難なり。かるが故に「飢饉」と謂はるるなり。

[60b³]　「大聚集」と謂はるるは、その時、諸人は大精進と大熱心と大整理と肉体の大辛苦とを以て食と衣とを成就するなり。かるが故に「大聚集」と謂はるるなり。

[60b³]　「阿蘭若」と謂はるるは、応に大広野の閑静処と水の荒れ野と盗賊の荒野あるが如く、その時、食と飲み物と衣服の大荒野あり。かるが故に「阿蘭若」と謂はるるなり。

[60b⁵]　「困苦」と謂はるるは、現今の倒れたるものがその時その時に困苦すると謂はるるなり。その時それ等の人は飢え、衰弱せるを以て地上に倒れるなり。倒れて立つことも能はず、また乞うことも能はず、彼等は自ずと死するなり。困苦してその人死するを以て、名は「困苦」「困苦」と謂はるるなり。或は又「困苦」を名づけて「筐」(cañcu) とも云ふなり。その時、それ等の人は種々の穀物と諸米を小筐中に入れ「是は諸の後生の穀物の種子になすなり」と謂ふて死する、かるが故に「困苦」と謂はるるなり。

七九

[60b⁸]　「籌によりて生活する」と謂はるるは、その時、諸人は地上に

種子を蒔くも、種子は小穀、若しくは一果のみを生ず。更にまた寿命短き諸人は、食し人に漸次、籌を以て分け与へ、その硬きものは主人が食し、鞘を取り去ったものは主婦が食するなり。その硬きものを兄弟は食して、鞘を取り去ったものは姉妹が食するなり、と謂ふなり。或は又その時、諸人は米倉と穀倉等より、種々の穀類を籌を以て探し、多量の水と共に壺の中に注ぎて煮て飲むなり。かるが故に「籌によりて生活する」と謂はるるなり。

[61a³]　「白骨」と謂はるるは、その時、諸人は餓えて衰弱して死し、彼等の骨は腐蝕し、脂肪は少しもなく、或は又その時、諸人はそれ等の骨を集め、多量の水と共に壺の中に注ぎ、骨の液を煮て飲むが故に「白骨」と謂はるるなり。

[61a⁵]　それ等を主とせる無量の門が説かれてあるなり。

[61a⁵]　その時その大飢饉の中劫は此の如くなるが、その時〔死する人の趣は〕何処が適当なるや。それらの死人は餓鬼に生ずるなり。

[61a⁶]　その飢饉の中劫は七年と七月と七日のみにして尽きるなり。七年と七月と七日とを過ぎて最後に至る、と謂はるるなり。

[61a⁷]　その時、飢饉の中劫に於て結束して避難し、譏り、普く非難せる者達の或る者は、諸の大河等と諸の大湖畔等と大池等と大沼沢等と池塘（vilva）等に詣りて、野生の櫻と優鉢羅の根等によりて生活して住し、七年と七月と七日に至りて小城と大城と境土と王宮の周囲等に還来す。彼等有情は互ひを相ひ見て、甚だしき慈愍と愛敬と謙遜と愛憐の心を以て近住し「嗚呼、生存せる有情を見るなり。嗚呼、生存せる有情を見るなり」と斯く云ふなり。

[61b³]　譬へば現在の諸人の母に、と広説するより、此の如く寿命十歳の諸人は「嗚呼、生存せる有情を見るなり。嗚呼、生存せる有情を見るなり」と云々までは前の所説の如し。

[61b³]　彼等は「我等は非法を行じ、背理をなす。このことと、苦悩を懐けるこのこととによりて」と斯く思惟して、云々は前の所説の

七八

如し。

[61b[4]]　「我等は何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」彼等は斯く思惟して「嗚呼、我等に殺戮あり。以て我等は殺戮を断ずべし」とて彼等は殺戮を断ずるなり。

[61b[5]]　寿命十歳の諸人、殺戮を断ずれば、彼等の産みたる諸児と諸児女は寿命二十歳を獲るなり、と云はるるより、寿命八万歳の諸人の諸穀は大にして甚だ大なり。譬へば因陀羅竹果の如く勝れ、最勝にして、唯だ一穂のみによりてさへ四斗斛を生ずる、と云はるまでが前の如く記述せられるなり。

## 11-9. 火壊中劫

[61b[7]]　火壊来たりて生起せし時、諸人は寿命八万歳を獲るなり。寿命八万歳の諸人は此の贍部州に在りて、富と豊満と安穏と豊年になりて、多くの民衆は満足し、寿命八万歳の諸人の、と云はるるより前の如くして、唯だ一穂のみによりてさへ四斗斛を生ずるなり、と云はるまでが前の如く記述せられるなり。

[62a[1]]　有情地獄等を以て諸の有情の転生することはなく、その時には応にこのこと決定するなり。地獄等を以て諸有情の転生することなきが故に、応にその故に此の世間は二十中劫のあいだ安住して、その最後に至ると説かるるなり。

[62a[3]]　地獄に於る有情の何者も残らず、その時には応にこのこと決定するなり。地獄に於て云何なる有情も残ることなきが故に、応にその故にその世間すなわち地獄は破滅に至ると説かるるなり。

七七

[62a[4]]　応に地獄に於るが如く、傍生と餓鬼に於る有情の何者も残らず、その時には応にこのこと決定するなり、と云はるるまでは前に説かれたるが如し。

[62a[5]]　此を以て此の世間は二十中劫にてその破滅を生起すると説かる

るなり。

[62a⁵]　贍部州に於て或る有情あり、また聖教（āgama）なくして法爾（dharmatā）によりて獲たる初禅に入定す。彼はその定より出て「嗚呼、離より生ずる喜と楽とは安穏なり、嗚呼、離より生ずる喜と楽とは安穏なり」と声をあげ詠言せり。その声は労少なくして一切贍部州にゆきわたり、その時それによりて他の有情等も又その声を聞きて法爾によりて獲たる初禅に入定する、その時には応にこのこと決定するなり。贍部州には云何なる有情も転生することなく、その時には応にこのこと決定するなり。

[62b¹]　贍部州に於て云何なる有情も残ることなく、その時には応にこのこと決定するなり。その時、贍部州に於て云何なる有情も残ることなきが故に、応にその故に此の世間すなはち地獄は破滅に至り、傍生は破滅に至り、餓鬼は破滅に至り、贍部州も破滅に至ると説かるるなり。

[62b³]　応に贍部州に於るが如く、東勝神州と西牛貨州もまたそれと同じなり。

[62b⁴]　北倶盧州に於て云何なる有情も残ることなく、その時には応にこのこと決定するなり。その時、北倶盧州に於て云何なる有情も残ることなきが故に、応にその故に此の世間すなはち地獄は破滅に至り、傍生は破滅に至り、餓鬼は破滅に至り、人も破滅に至ると説かるるなり。

[62b⁶]　四大王の諸天に於て或る有情あり、また聖教なくして法爾によりて獲たる初禅に入定す。彼はその定より出て「嗚呼、離より生ずる喜と楽とは安穏なり、嗚呼、離より生ずる喜と楽とは安穏なり」と声をあげ詠言せり。その声は労少なくして一切四大王の諸天にゆきわたり、その時それによりて他の有情等も又その声を聞きて法爾によりて獲たる初禅に入定する、その時には応にこのこと決定するなり。四大王の諸天に於る云何なる有情も転生するこ

七六

となく、その時には応にこのこと決定するなり。

[63a[1]]　四大王の諸天に於て云何なる有情も残ることなく、その時には応にこのこと決定するなり。その時、四大王の諸天に於て云何なる有情も残ることなきが故に、応にその故に此の世間すなはち地獄は破滅に至り、傍生は破滅に至り、餓鬼は破滅に至り、人は破滅に至り、四大王の諸天は破滅に至ると説かるるなり。

[63a[4]]　応に四大王の諸天の如く、三十三〔天〕と夜摩〔天〕と兜率〔天〕と化楽〔天〕と他化自在の諸天もまたそれと等しきなり。

[63a[5]]　その時、他化自在の諸天に於て云何なる有情も残ることなきが故に、応にその故に此の世間すなはち欲界は破滅に至ると説かるるなり。

[63a[6]]　梵界（brahmaloka）に於て或る有情あり、また聖教なくして法爾によりて獲たる第二禅に入定す。彼はその定より出て「嗚呼、三昧より生ずる喜と楽と寂静とは安穏なり、嗚呼、三昧より生ずる喜と楽と寂静とは安穏なり」と声をあげ詠言せり。その声は労少なくして一切梵界の諸天にゆきわたり、その時それによりて他の有情等も又その声を聞きて法爾によりて獲たる第二禅に入定する、その時には応にこのこと決定するなり。梵界に於て諸有情は転生することなく、その時には応にこのこと決定するなり。

[63b[1]]　梵界に於て云何なる有情も残ることなく、その時には応にこのこと決定するなり。梵天に於て云何なる有情も残ることなきが故に、此の世間すなはち梵界は破滅に至ると説かるるなり。

[63b[3]]　此の世間は虚空になり、天はまた折々に甘雨を降らさず、諸天は折々に甘雨を降らさざるを以て、此の大地に於る種子の聚と樹木の聚と薬〔草〕と草と果樹の一切は枯涸し、破滅に至りて虚無に帰するなり。

七五

## 11-10. 七日

[63b[5]]　長時を経たるその時、二太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。二太陽の世間に生起せるを以て、此の大地に於る小池塘と大池塘との一切は枯涸し、破滅に至りて虚無に帰するなり。

[63b[6]]　長時を経たるその時、三太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。三太陽の世間に生起せるを以て、此の大地に於る小河と大河との一切は枯涸し、破滅に至りて虚無に帰するなり。

[63b[8]]　長時を経たるその時、四太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。四太陽の世間に生起せるを以て、此の大地に於る無熱悩池（Avatapta）と名づけられたる大湖、すなはち恒河（Gaṅgā）信度河（Sindhu）縛芻河（Vakṣu）徒多河（Sītā）の四大河を生起せしめるところのその大湖はその時枯涸し、破滅に至りて虚無に帰するなり。

[64a[1]]　長時を経たるその時、五太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水は百由旬枯涸し、破滅に至りて虚無に帰し、水の二〔百〕由旬、三、四、五、七〔百由旬〕等と更に枯涸し、破滅に至りて虚無に帰するなり。

[64a[3]]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は七千由旬を残すところとなりて〔次第に〕六千由旬、五千、四千、三千、二千、一千〔由旬〕を残すところとなるなり。

[64a[5]]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は七百由旬を残すところとなりて〔次第に〕六百由旬、五百、四百、三百、二百、百〔由旬〕を残すことになるなり。

[64a[6]]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は七由旬を残すところとなりて〔次第に〕六由旬、五、四、三、二、一〔由旬〕

を残すところとなるなり。

[64a⁷]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は七倶盧舎を残すところとなりて〔次第に〕六倶盧舎、五、四、三、二、一〔倶盧舎〕を残すところとなるなり。

[64a⁸]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は七多羅を残すところとなりて〔次第に〕六多羅、五、四、三、二、一〔多羅〕を残すところとなるなり。

[64a⁸]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は身長七人分を残すところとなりて〔次第に〕六、五、四、三、二、一人分を残すところとなるなり。

[64b¹]　五太陽の世間に生起せるを以て、大海の水〔深〕は頸に達する程を残すところとなりて〔次第に〕腋、臍、腰、腿、脛、踝に達する程を残すところとなるなり。

[64b³]　五太陽の世間に生起せるを以て、水は普く涸渇し、破滅に至りて虚無に帰し、最後には中指を濡らす程〔の水〕すら無きなり。

[64b³]　長時を経たるその時、六太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。六太陽の世間に生起せるを以て、此の大地と須弥山王に煙霧は上昇し、善く上昇し、普く善く上昇するなり。恰も陶工（kumbhakāra）が〔竈に〕点火し、最初の火種を造るとき、煙霧は上昇し、善く上昇し、普く善く上昇するが如く、六太陽の世間に生起せるを以て、此の大地と須弥山王に煙霧は上昇し、善く上昇し、普く善く上昇するなり。

[64b⁶]　長時を経たるその時、七太陽、世間に生起する、その時には応にこのこと決定するなり。七太陽の世間に生起せるを以て、此の大地と須弥山王は燃え、激しく燃えて一焔となり、燃焼するなり。譬へば薪十束によりて、若しくは二十、若しくは三十、若しくは四十、若しくは五十、若しくは薪百束、若しくは薪千束、薪百千束によりて大火焔を燃するが如く、七太陽の世間に生起せるを以

七三

て、此の大地と須弥山王は燃え、激しく燃えて一焔となり、燃焼するなり。

[65a[1]]　此の大地と須弥山王が燃え、激しく燃えて一焔となり、燃焼せる火焔は、風によりて上方に運び去られて梵〔天〕の不可量なる虚空住房に至るまで燃す。光音の天衆（devanikāya）に生じてより時久しからざる或る有情は、此の世間の破滅せる原因に通暁せず、成就する原因に通暁せず。彼等はその火焔を見て「此の火焔は梵〔天〕の量なき虚空住房に至るまで燃し、ここには来たらざるや」とて歓ばずして悲しむなり。

[65a[4]]　その時、光音天衆に以前より生ぜし有情は、此の世間の破壊の原因に通暁し、成就する原因に通暁せるを以て、彼等は恐怖せるその有情等に「友よ、恐るべからず、恐るべからず、此の燃焼せる火焔は、昔時にも梵〔天〕の不可量なる虚空住房に至るまで燃してより、自然に消失せり。今もまた此の燃焼せる火焔は、梵〔天〕の不可量なる虚空住房に至るまで燃してより、自然に消失するならん」と号声を発するなり。

[65a[6]]　七太陽が世間に出現せるを以て、須弥山王の頂上百由旬は破滅に至り、甚だしく破壊して荒廃し、敗滅に帰するなり。頂上二百由旬、三百、四百、五百、六百、七百〔由旬〕もまた破滅に至り、甚だしく破壊して荒廃するなり。

[65a[8]]　此の大地と須弥山王は燃ゆるも、燃焼せる煙霧はまた無く、灰燼の余残もまた無し。喩へば油、若しくは菜油の如きものにして虚空に燃ゆるも、燃焼せる煙霧はまた無く、灰燼の余残もまた無きが如く、此の大地と須弥山王は燃ゆるも、燃焼せる煙霧はまた無く、灰燼の余残もまた無し。

[65b[2]]　此の如く、壊劫中に在るこの世間に、諸雲は僅かの水も与へず、一太陽によりて根と樹幹と薬〔草〕と種子と樹木との多くは尽き、二太陽によりて塘とその如き小河は枯涸し、大池塘の聚と大河の

七二

諸水は三太陽によりて無に帰し、非人の住処たる大湖、無熱悩と名づけられ、甚だ意に快く清浄なる水を以て普く満たされたるそは四太陽によりて枯涸し、無量の宝珠もて満ちたるは悉く破壊し、大有情衆等の住処は変じ、大海等は五太陽によりて普く焦がれて余すところなく枯涸し、地と雪山と須弥と七大金山とは六太陽によりて普く焦がれ、一切の煙霧は普く上昇し、七太陽昇りて此処に光網（raśmijāla）をもたらすその時、地と諸山は普く甚だしく燃ゆるなりと謂はるるなり。

[65b⁷]　光網の善き音を持するはその七太陽が原因なり。此の地と、金地と、八地獄と、一切の諸山と、欲〔界〕の諸天の住居と、一切の欲〔界〕の住処に至り、欲〔界〕の無量諸天は普く容貌端麗なるを離れ、梵〔界〕の諸住処は普く燃し、応に説かれるが如く余りなく普く燃して、憶劫の大光明を持する太陽も、また自ずから力を失ひて無常の故に破毀し破壊するなり。

[66a²]　此の如き山と大海と地と、此の如き天上の尽きたるを知り、善士（satpuruṣa）等は依止して聖処を常に意に留めるべし、と謂はるるなり。

## 11-11. 教証（『七日教誨』）

[66a³]　世尊はまた『七日教誨』を以て此の如く〔説けり〕「比丘等よ、一切行は無常なり、不堅固に非ず、安息なく、変壊の法を持するなり。比丘等よ、一切行を以て普く成し、円満せるは善し。無貪なるは善し、解脱を成すは善きなり。比丘等よ、長時を経てまた降雨せず、その時には応にこのこと決定するなり。降雨せざるを以てこの大地に於る種子の聚と樹木の聚と薬〔草〕と草と果樹の一切は枯涸し、破滅に至る。比丘等よ、此の如く一切行は無常なり、堅固に非ず、安息なし、此の如く変壊の法を持するなり。比丘等よ、一切行を以て普く成し、円満せるは善し。無貪なるは善

七一

し、解脱を成すは善きなり。比丘等よ、長時を経てまた」と云はるるより「その時には応にこのこと決定するなり」と云はるるまでが説かるるなり。

## 11-12. 風壞中劫

[66b[1]]　此の世間はまた燃へて虚空にはまた風が生起するなり。それのみによりて此の世間は二十中劫にてその破滅は終局に達するなりと云はるるなり。その時此の世間は二十中劫を以て破壞を成じ、そはまた生起せり、と説かるるなり。

[66b[3]]　長時を以て虚空より微風の生起するのみあり。それのみによりて此の世界は二十中劫にて破壞し已りて終局に達するなり、と説かるるなり。

## 11-13. 風輪の形成

[66b[4]]　その時此の世間は二十中劫にて生成し、また生起するなりと説かるるなり。

[66b[4]]　その風はまた増大して猛威となり、その風は風輪（vāyumaṇḍala）となる。高さは百六十万由旬あり、広さは無数（阿僧祇）無量なり。甚だ堅固にして濃密なり、それが大諾健那〔力〕(Mahānagna)・鉢羅塞健提〔力〕(Pratiskandin) 那羅延力（Nārayaṇabala）を以て拡がる時、雷金剛（vajra）は降らさざるなり。

## 11-14. 水輪の形成

[66b[6]]　長時を経たるその時、その風輪の上面に車軸ほどの続雨は降るなり。風輪はそれ等〔の雨水〕を普く摂し、善く持して失はせしめず、そは水輪（jalamaṇḍala）と云はるるなり。高さ百十二万由旬あり、広さ百二十万由旬と四百五十由旬あり、全周三百六十万由旬と三百五十由旬あり。

七〇

### 11-15. 金輪の形成

[67a²]　長時を経て、その水輪の上面に風の生起する時あり。風はそれらの水を普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、上面は水と等しくならしむるなり。そは金の大敷地なり、高さは三千二万由旬あり、広さ百二十万由旬と四百五十由旬あり。全周は三百六十万三百五十由旬あり。

### 11-16. 海の形成

[67a⁴]　長時を経て、その金の大敷地の上面に車軸ほどの続雨は降るなり。その金の大敷地はそれ等〔の雨水〕を普く摂し、善く持して失はせしめず、そは水の大海なり。

### 11-17. 須弥山の形成

[67a⁶]　その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしむるなり。普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは須弥（Sumeru）と名づけられたる山王（parvatarāja）なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、八万由旬は水中より上方に出るなり。その高さ六十万由旬あり。縦は八万由旬ありて横も又八万由旬あり。全周は三十二万由旬ありて形容は善く、楽見するところにして端厳なり。四種の宝珠を以て成ぜらるるなり。

### 11-18. 持雙山の形成

六九

[67b²]　水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむ

るなり。そは持雙（Yugaṃdhara）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、四万由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-19. 持軸山の形成

[67b[6]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは持軸（Īsādhara）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、二万由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-20. 檐木山の形成

[68a[1]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは檐木（Khadiraka）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、一万由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-21. 善見山の形成

[68a[5]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそ

れ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは善見（Sudarśana）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、五千由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-22. 馬耳山の形成

[68a[8]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは馬耳（Aśvakaṇa）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、二千五百由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-23. 尼民達羅山の形成

[68b[3]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは尼民達羅（Nimindhara）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、千二百五十由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-24. 障礙山の形成

[68b[6]]　長時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは障礙（Vinataka）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、六百二十五由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-25. 鉄囲山の形成

[69a[2]]　時を経て、その水の大海の上に、内見と外見との風は普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしめ、下方に降下せしめ、また上方に隆起せしむるなり。そは鉄囲（Cakravāda）と名づけられたる山王なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、三百十二由旬は水中より上方に出るなり。広さはまたそれと等しくして、形容は善く、楽見するところにして端厳なり。金を以て成ぜらるるなり。

### 11-26. 南贍部州の形成

[69a[5]]　長時を経て、その水の大海の上、須弥山王の南方の大外海中に、内見と大内と外見との車輪の如き風は普く起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしむるなり。普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、上面は水と等しくならしむるなり。そは贍部州（Jambūdvīpa）と名づけらるるなり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、上方は水面と等しきなり。その内辺の長き

ものは二千由旬あり、内辺の短きものは三由旬半、全周は六千由旬と三由旬半あり。形容は善く、楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜらるるなり。

### 11-27. 東勝神州の形成

[69b²]　長時を経て、その水の大海の上、須弥山王の東方の大外海中に、内見にして大外なる風、普く半月の如くなりて起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしむるなり。普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、上面は水と等しくならしむるなり。そは東勝神州（Pūrvavideha）と名づけらるるなり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、上方は水面と等しきなり。その内辺の長きものは二千由旬あり、内辺の短きものは三百五十由旬、全周は六千由旬と三由旬半あり。形容は善く、楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜらるるなり。

### 11-28. 西牛貨州の形成

[69b⁷]　長時を経て、その水の大海の上、須弥山王の西方の大外海中に、内見と外見との風、普く半円に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしむるなり。普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、上面は水と等しくならしむるなり。そは西牛貨（Aparagodānīya）と名づけらるる州なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、上方は水面と等しきなり。縦二千五百由旬、横もまた二千五百由旬ありて、全周は七千五百由旬あり。形容は善く、楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜらるるなり。

六五

## 11-29. 北倶盧州の形成

[70a[4]]　長時を経て、その水の大海の上、須弥山王の北方の大外海中に、内見と外見との風、普く四隅に起こる、その時には応にこのこと決定するなり。それ等はそれ等の水を普く聚め、普く凝固せしむるなり。普く聚め、普く凝固せしめて一処に聚集し、下方に降下せしめ、上面は水と等しくならしむるなり。そは北倶盧（Uttarakuru）と名づけらるる州なり。八万由旬は水面下なる金の大敷地に依拠し、上方は水面と等しきなり。縦二千由旬、横もまた二千由旬ありて、全周は八千由旬あり。形容は善く、楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜらるるなり。

## 11-30. 地上世界への有情の転生

[70a[8]]　長時を経て、虚空に於る梵界の不可称なる虚空住房は善住処となる、その時には応にこのこと決定するなり。その時、他の諸有情は寿命尽き、業尽き、福徳尽きて光音天種より転生し、梵界の不可称なる虚空住房に生ずるなり。それより他の諸有情もまた寿命尽き、業尽き、福徳尽きて光音天種より転生し、梵輔天に生じ、それより梵種に生じ、それより四大王種の諸天に至るまで転生するなり。

[70b[3]]　それのみによりて世間は二十中劫にしてその成〔劫〕(vivarta)の終局に達するなりと説かるるなり。それゆえ此の世間は二十中劫を以てその已成は起こるなりと説かるるなり。

[70b[4]]　長時を経て、その水の大海の上に車軸ほどの続雨は降るなり、その時には応にこのこと決定するなり。その雨はまた諸湖を満たして、また諸州を水と等しくせしむるなり。此の大地をして一水一海になさしむるなり。大地は一水一海になりし上を風は泡渣を普く聚め、普く凝固せしむるなり。善く住せしめて普く撒布するなり。譬へば乳を煮て冷したる上面に於て風は泡渣を普く聚め、

普く凝固せしめ、善く住せしめて普く撒布するが如く、大地は一水一海になりし上を風は泡渣を普く聚め、普く凝固せしむるなり。善く住せしめて普く撒布するなり。そは色を具足し、香を具足し、味を具足したる地味（pṛthvīrasa）なり。色は譬へば酥油の如し、味は譬へば蜂蜜を煮るが如きなり。

[71a²]　その時、他の諸有情は寿命尽き、業尽き、福徳尽きて光音天種より転生し、此の世間に生ずるなり。彼等は此処に於て、善き容色と、意より生ずるものと、無垢完全なる諸根と、一切の肢体とを具へ、善と妙色と歓喜食と歓喜縛食とを〔持し〕、自ずから光耀を発し、虚空を飛行し、長寿なりて長時に住するなり。

[71a⁴]　その時、太陽と月との二は倶に世間に生起せず、星辰もまた生起せず、季節も諸年歳また生起せず、諸月も半月もまた生起せず、夜と昼も生起せず、刹那と臘婆と須臾もまた生起せず、丈夫も女子もまたなし。余処にては誰だ「有情」「有情」と云はるる名のみ生起するなり。

（世間施設第６巻了、第11章は続く）

六三